

新しきを知る 新しい道の歩き方



写真提供: kyoto-design.jp

桂川にかかる渡月橋。その先には法輪寺が見える

自分がよく知っている場所だと思っても、人を案内すると新しい発見があります。このことに気付いたのは私がまだ同志社高校の教諭をしていた40年ほど前。高校生や大学生を自分の生まれ育ったアメリカ・サウスダコタ州に毎年連れていくようになってからです。だから今となっては、同じように外国人や他府県の日本人を京都案内に連れていき、私自身が新しい発見をするということがとても楽しいんです。

先日、京都市外大生を連れて、嵐山周辺を歩く機会がありました。国際フォーラムでマレーシア、タイ、ベトナム、インドネシア、ラオスの学生と先生たちが来日するので、案内する学生を下見に連れていきました。阪急嵐山駅で集合してまず向かったのは法輪寺。法輪寺は713年に建立された真言宗のお寺ですが、京都の人にとっては子どもが数え年で13歳になると連れていく十三まいりで最も知られている

教えてくれました。「満月が橋を渡っているように見える」から「渡月橋」と呼ばれるようになったという話は有名ですが、驚いたのはもともと「法輪寺橋」と呼ばれていたという話です。その理由は、836年に現在の大覚寺で隠居生活を送っていた嵯峨上皇が、法輪寺にお参りに行きたいと言われ、そのために橋をかけたことが起源とされているということでした。

つくづく、自分がよく知っていると思う場所でも新しく知ることがあるという体験でした。や

でしょうか？長い階段を上ると虚空蔵菩薩像が奉納されている本堂が見えてきます。すると、階段を上っている途中で学生が「エンジン！」と口にしました。私もそれまで気付かなかったのですが、法輪寺に祀られている虚空蔵さんが雷と関係があるので、電気に関係しているエンジンのレリーフが飾られています。自分と違う目を持つ学生と一緒に来ると新しい発見がいっぱいあります。

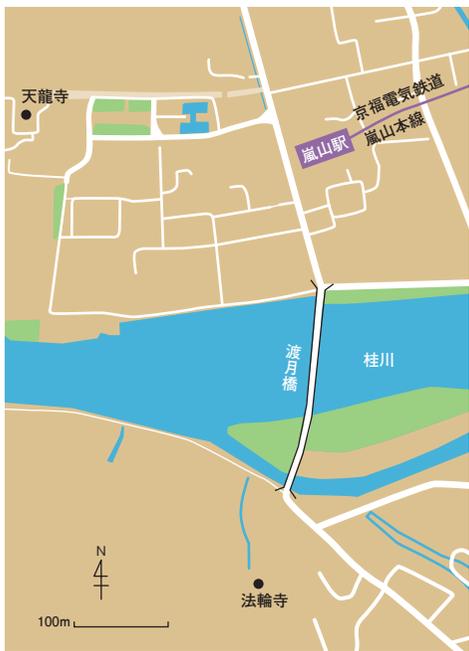
法輪寺には京都市内を一望できるおすすめの展望台があるので、そこで学生からこんな疑問が飛び出しました。「なぜ、嵐山は嵐山というのか？」。そういえば、京都に50年住みながら地名についてあまり考えたことがなかったもので、法輪寺のご住職に尋ねてみました。もちろん諸説あるということが前提ですが、日本書紀に記されている「アラスの山」が「嵐山」になったという説。そして、春になると山の桜の花びらが嵐のように花吹

はり、京都の地名や通りの名前、もちろん橋の名前に至るまで、聞けば聞くほど、知れば知るほど歴史が感じられる奥行き深さが京都を歩く醍醐味なんだなと実感した一日もありました。私の知る道は私の道。あなたの知る道はあなたの道。しかし、それぞれの道を初めて歩く人と一緒に歩いてみてください。あなたの道にこれまで知らなかった新しい発見が加わりますよ。



十三まいりで有名な法輪寺。本尊の虚空蔵菩薩に詣で、智慧を授けていただく

雪となり、秋には真っ赤な紅葉の葉が嵐のように散っていくからという説もあるというお話でした。個人的には、後者の方が情景が目に浮かび美しいので私は大好きですが、さらに私をドキッとさせた学生の疑問は、嵐山の代名詞でもある、渡月橋の名前の由来。何十回と渡ったはずですが、考えたことがありませんでした。こちらでも法輪寺のご住職が



〈ジェフ・バーグランド〉

京都外国語大学国際貢献学部グローバル観光学科教授。専門は異文化コミュニケーション。アメリカ・サウスダコタ州生まれ。江戸時代後期に建てられた京町家に暮らし、執筆・講演・メディア出演多数。2014年京都国際観光大使に就任。KBS京都の『JEFF@KYOTO おもてなし京都観光』は、YouTubeでも配信されている。